

# 寒冷地での秋どりイチゴの 養分吸収特性

《寒冷地での短日処理によるイチゴ》  
《秋どり栽培》

「とちおとめ」などの一季成り性イチゴ品種は、低温・短日の条件下で花芽を形成します。夏季冷涼な東北地域では、6～7月にイチゴの苗を完全に遮光できる資材で朝夕に覆い、8時間日長とする短日処理（写真）を30～45日間程度行うことで、イチゴの花芽を分化させ、9～11月に高品質の果実を収穫できます。

夏秋どりイチゴ研究チームでは、東北各県と連携して、この短日処理によるイチゴ秋どり栽培の技術開発とその普及を進めていますが、多収のための施肥法やその基礎となる養分吸収量は、これまでに明らかになっていませんでした。そこで、この栽培に適した施肥法の開発を目的として、本栽培の養分吸収量や窒素吸収パターンを明らかにしました。



写真：短日処理施設の一例

遮光資材を張った開閉可能な簡易施設に苗を入れ、朝夕に開閉して短日処理を行う

## 《秋どりイチゴの養分吸収量》

5月中下旬からイチゴ子苗のポット育苗を開始し、6月下旬から7月下旬に8時間日長の短日処理を行った後、施設内に定植し、9月下旬から12月上旬まで収穫するイチゴ秋どり栽培での養分吸収量は、株当たり窒素1.5g（a当たり1.0kg）、リン0.22g（同0.15kg）、カリ1.5g（同1.0kg）であり、「女峰」、「とちおとめ」、「さちのか」、「北の輝」の各品種間で大きな差はみられませんでした（表）。

表 イチゴ秋どり栽培の養分吸収量

養分	養分吸収量	
	株当たり (g/株)	a当たり (kg/a)
窒素(N)	1.48	0.98
リン(P)	0.22	0.15
カリ(K)	1.54	1.03

## 《品種ごとの窒素吸収パターン》

一方、最も重要な養分である窒素の吸収パターンを7月から11月までの月別窒素吸収量の推移で評価した場合、品種間で明瞭な差がみられました（図）。

例えば、東日本での主力品種である「とちおとめ」では、収穫盛期である10～11月を通して窒素吸収量が最も多くなります（図A）。このことから、「とちおとめ」では収穫期を通して充分

夏秋どりイチゴ研究チーム

山崎浩道

YAMAZAKI, Hiromichi

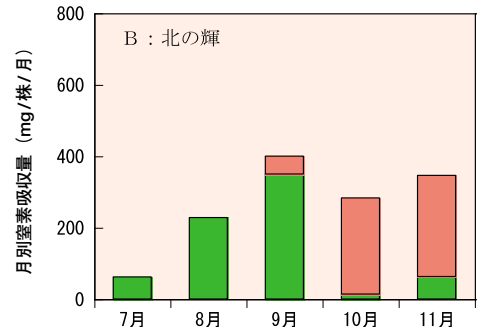
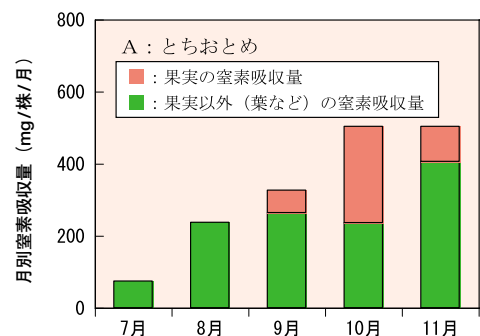


量の窒素が供給されるような施肥が適していると推定されます。

一方、主に東北地域で作付けされている「北の輝」では、9月に窒素吸収量が最も多くなり、10月以降には果実以外の部位（葉など）の窒素吸収量が著しく減少します（図B）。これは、休眠（冬期に生育が停止する生理現象）が早く始まる本品種の特長によるもので、収穫期には果実生産による株への負担が非常に大きくなっていると推定されます。このため、本品種では休眠前（9月）に窒素を充分に与え、株の生育を確保することが重要と考えられます。

なお、窒素吸収パターンは「女峰」、「さちのか」でも明らかになっており、やはり品種間で異なります。

以上のように、寒冷地でのイチゴ秋どり栽培の養分吸収量および品種毎の窒素吸収パターンが明らかになりました。今後は、これらの結果を基に、各品種に適した具体的な施肥法を開発し、本栽培の普及に貢献したいと考えています。



図：イチゴ秋どり栽培での月別窒素吸収量  
A：とちおとめ、B：北の輝